

## 瞬間・メシア・他性

### ——『実存から実存者へ』の時間論分析——

石井雅巳（慶應義塾大学大学院文学研究科）

#### 要旨

本論文の主眼は、エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)の初期の代表的な著作である『実存から実存者へ』(1947)を時間論的観点から読解することにある。これまで『実存から実存者へ』の読解は、主としてそのタイトルが示すように、「存在者なき存在」という *il y a*（ある）の次元からいかにして主体が現れるかという主体性論に強調が置かれてきたように思われる。たしかに、ハイデガーの存在論的差異を踏まえつつも真っ向からぶつかる主体性にかんする議論は、「逃走論」(1935)から「主体性擁護の書」と自身が述べた『全体性と無限』(1961)、「迫害」や「感受性」を核とする『存在の彼方へ』(1974)における自我論に至るまで、レヴィナスにおいて重要な論点であり続けた。

しかし、旧来の研究では、レヴィナス本人による「この研究を導いている根本的な主題は、時間の概念である」という表明は十分に注目されてこなかったと言える。そこで本論文は、この表明に着目し、著作全体を一貫して追う観点として「時間論」を取り出し、必要に応じて未公刊草稿の記述も精査しつつ、西洋哲学的側面とユダヤ教的側面の両面から『実存から実存者へ』を分析する。具体的には、まず同書冒頭部にある主体生成についての記述のうちに潜む時間性をフッサールやハイデガーの議論を踏まえつつ整理する（第1節）。次に、前節で取り出された時間の議論が「メシア的時間」という問題圏へとつながっていることを確認し、伝統的なユダヤ思想におけるメシア理解に加え、レヴィナスと同時代人でありユダヤ思想研究の大家である G. ショーレムのメシア論との対比によって、レヴィナスの「メシア」概念に含意された独特の意味とその思想的意義を炙り出す(第2節)。そして、つづく節ではレヴィナスが独自の意味を込めて使う「瞬間」概念に着目し、この特異な「瞬間」概念をデカルトの「連続創造説」への言及を手掛かりに明らかにし、他性の問題へと接続させる（第3節）。

上記の考察を通して、本論文は、時間論的な視座のもとレヴィナスの記述を読解・再構成することではじめて、これまで個別的な論点として扱われてきたきらいのある (1)主体の生成(2)時間を等価的な流れと捉える見方への抵抗(3)他性が入り込む次元といった問題群を一貫した観点から解釈可能であることを提示したい。